令和５年度第３回仙台市若林区区民協働まちづくり事業評価委員会
令和６年度仙台市若林区まちづくり活動助成申込事業　計画説明会　議事要旨

日　時：令和６年３月２日(土) １０：００～１２：００
会　場：若林区役所４階　第２会議室
出席者：針生委員長、田澤副委員長、神坂委員、玉渕委員、
広瀬委員、高橋委員、菅原委員
若林区役所まちづくり推進課事務局

１．開会
評価委員の紹介、概要説明

２．申込事業計画説明及び質疑応答
（１）事業名：あらい七夕プロジェクト
団体名：あらいフェローズ

＜プレゼン概要＞
・地域の町内会や地域に住む人、関わる人たちが主体となり「七夕かざりの制作・展示」「あらい七夕まつりの開催」「深沼海岸の廃品を使った楽器の制作・ミニコンサート」などを行う。そのことで、地域内で顔の見える関係やコミュニティ作り、交流の機会作りを図る。

＜質疑・意見＞
Q　復興風船は元々仮設住宅の住民が作成したものであるが、その方々の協力を得て作成するのか。それとも、あらいフェローズのスタッフが一から作成するのか教えていただきたい。
また、廃材を使い楽器を作るということだが、相当の技術が必要だと思われる。作成をコーディネートする方がいるのか教えていただきたい。
A　海辺の図書館関係者から、以前避難所に住んでいた方で、復興風船を作っていた方をご紹介いただいた。その方から、あらいフェローズのメンバーや興味がある地域の住民と一緒に教えてもらう予定である。また、地域の皆様と折り紙の機会を設ける予定であり、復興風船の作り方を教えてもらったメンバーが来てくれた方に教えるという流れを考えている。
楽器作りは YouTube を参考にして作る予定だが、昨年歌作りに協力してくれたメンバーからアイデアをいただいたり、音を合わせたりなどして作成する。

Q　「地域内企業への協力依頼」「地域活性応援」は事業の一環として行うものか。
A　事業の活動資金を工面するため、地域の皆様に支えていただく必要があり、協力をいただくだけではなく、何か企業側に協力していきたいと考えており、事業の一環として行う。

Q　地域との関係性を構築する中で、住んでいる方と働かれている方とでアプローチの方法が変わってくる。現時点で町内会が求めていることや企業側が求めていることをどのように把握されているか。また、町内会と企業間でどのような連携をしたいと望んでいると感じるか教えていただきたい。

A　地域の方から「東日本大震災前まで住民と企業との間で顔の見える関係性がこの地域にはなかったが、震災を経験したことでその重要性に気付いた」という意見があったことから、このプロジェクトが始まり、町内会や企業との顔が見える関係性づくりに力を入れてきた。特に、「荒井東地区に関わる方」という括りで、住民と企業の区別をせずにこの活動を行ってきた。企業側のアプローチとしては、住民との温度差があり、荒井東は職場で働きに来ているだけの場所であるが、一方で会社として地域貢献をしなければならないという思いがあり、普段から地域との関わり合いがないので、どうやって貢献をして良いか分からず、今まで会社の周りのゴミ拾いだけしていたという企業も存在した。そのため、七夕飾りの制作に参加することで、思いが合致するところはあると感じている。

Q　七夕飾りの短冊には願いや祈りを込めるが、それらを書いてもらう際にどのようにお願いしているか。

A　昨年度までは子供たちに記入をお願いしていたが、今年度は荒井駅の通路に飾る吹き流しの作成に協力いただいた方々に、地域への思いや期待することなどを書いてもらった。

Q　飾りを飾ることに終始してしまうと思われるが、例えば、当日おまつりに浴衣で来た来場者に対して、プロの写真家に家族写真を撮ってもらう企画など、色々な仕掛けを作り、ミニコミ誌を活用すれば更に盛り上がると感じた。

A　そういったアイデアはなかったため、是非参考にさせていただきたい。

Q　本事業のターゲットは子供であると思うが、高齢者に向けた取り組みはされているか。

A　例年、町内会の老人会や地域包括支援センター等にお声がけをし、折り紙の協力をいただいている。

Q　荒井東には復興住宅があり、震災から年月は経っても、そこにお住いの方々への支援は大きな地域課題だと思うが、その町内会や住んでいるご高齢の方々を取り込む機会はあるか。また、アライデザインセンター内の不登校児童・生徒の居場所施設を利用するとあったが、これまで、こういった方々が参加したことはあったか。

A　復興住宅に住んでいる方々には、この事業を始める際にお声がけしたが、町内会として参加するのは難しいとお話があった。ただ、「復興住宅お茶会」のメンバーは参加したいと希望があったため、毎年七夕づくりに参加していただいている。
それと、児童や生徒については、昨年はアライデザインセンターの壁面に折り紙を貼ってもらい夏の飾りを作ってもらった。

（２）事業名：AWESOME　PORT プロジェクト
　　団体名：オーサム・カフェ
＜プレゼン概要＞
・不登校児童・生徒のコミュニケーション能力や社会性、情緒的行動などの発達促進を意識したプログラムを複数回企画し、固定した場所が無くても居場所としての機能の一部を担えるような機会創出の検証を行う。

【質疑概要】
Q　現在は様々な会場を借りて開催しているとのことだが、どのような会場で開催しているか。その時、どれ位の人数が集まったのかお聞かせ願いたい。
A　出張オーサムカフェとして様々な場所をお借りし、開催しているが、今月は六丁目農園をお借りし、40 人の定員を予定している。今後は以前までオーサムカフェがあった場所を週に 1 度お借りし、学生の居場所を再開するとともに、母親や近所住民が集まって交流を図れる「ご飯会」も開催する予定。

Q　すごく意義のある取り組みであるし、趣旨も理解できるが、当該事業は福祉分野や教育分野が非常に当てはまると考える。敢えて、まちづくりの部分で挑戦したきっかけや背景があれば教えていただきたい。
A　本事業がまちづくりにどのように還元されるかだと思うが、現状荒井地域で様々な活動をする中で、地域の方々のサポートが非常に大きいと感じている。その地域の方々を巻き込み、一体となって事業を展開しているという意味ではまちづくりの分野が適していると考えた。

Q　今通っている子供たちはどの地域に住んでいる子供たちか。
A　自分が住む地域の支援施設に連れて行きにくいという実態があるため、イベント毎に様々な地域から子供たちが来ており、他の区から来ている子供もいる。

Q　普段から地域との交流がない方や閉じこもってしまっている方に対し、どのように情報を発信し、継続して参加してもらうのか、工夫があれば教えていただきたい。
A　情報発信の手段は youtube や instagram を活用している。工夫としては、これまで参加した母親の意見を聞くと、母親自身が子供を連れて行きたいと思っても、中々連れて来れないという意見があった。なので、子供も行ってみたいと思えるように、まずは、母親が楽しんでもらえるような企画、雰囲気作りをしている。

Q　不登校支援で重要なことは、居場所を作り、自己肯定感を高め、前向きになるエネルギーの充電期間である。この事業に参加する子供たちがどのような未来を歩んでいって欲しいか、考えがあればお聞かせ願いたい。
A　人との出会いが考え方を大きく左右すると感じている。狭い世界にいるのではなく、様々な出会いの中で、多くの選択肢を見つけて欲しいと考えている。

Q　母親も子育てがプロというわけではなく、自身の経験だけに限定されてくると気持ちが沈んでしまうことがある。一方で、他の親の悩みに共感することで、自分自身も肯定さ

れていくことがある。ワークショップを通じて、子供だけでなく母親にもどういう前向きなアプローチをしているのか工夫があれば教えて欲しい。

A　イベントを開催する過程で、母親の学びに繋がるような心理学などを学び、そこで誰かと出会い友達になり、違う居場所を見つけ、元気になっていく姿を見てきた。
また、この事業には様々な企業や立場の方が関わっており、それらの企業が提供する就労体験に子供たちが参加し、世間に、そして社会に繋げていく過程を見せることで、母親にも前向きな気持ちを与えることができている。

Q　一回のイベントでどれくらいのスタッフが参加しているか。

A　メインで活動をしている運営スタッフ３名はどのイベントにも必ず参加する。その脇を支えるサポートでは、フリーでデザイナーをしているものが、製作やSNSの発信で関わり、他にも、場を提供してくれる企業、不登校支援をされている方々がネットワークで活動の幅を広げてくれたり、マンパワーとなってくれることもある。
なので、小さなイベントであればスタッフは7、8名。大きなイベントになれば、繋がりのある方にお声がけし協力を仰ぐこともあれば、協力したいと申し出があったりもする。

（３）事業名：荒町 100 年ミライチズ制作（荒町のミライチズを描こうプロジェクト）
団体名：TAU ラウンドテーブル

＜プレゼン概要＞

・荒町地域に関わるステークホルダー（商店街店主、地域住民、学生、教職員、その他社会人など）が、荒町地域全体で 100 年先を見据えてアクションを起こしていく「荒町のミライチズを描こうプロジェクト」。同プロジェクトで「荒町 100 年ミライチズ」を制作する。「荒町 100 年ミライチズ」は、100 年先のまちの姿を描いていくことを見据え、第一歩として現在の荒町の姿及び将来像を「ミライチズ」として形にするためにマップ制作を行うものである。

【質疑概要】

Ｑ　現状感じている荒町の課題について具体的にお聞かせ願いたい。

Ａ　現在は荒町商店街の声を聞いているところであり、これから荒町地域全体の声を聞いていくことになるが、商店街の声としては、東北学院大学五橋キャンパスが開学してから、学生は増えたものの、商店街を利用している学生が少なく、交流をもっと増やしていきたいとの声があった。

Ｑ　印刷費として 40 万円計上されているが、どれ位の期間で何部作る想定か。

Ａ　5,000 部作る予定。東北学院大学の新入生が 3,000 人には全員へ配布し、他には荒町商店街や荒町市民センター、児童館等に配布する予定。

Ｑ　計画書やプレゼンの中で度々地域住民という言葉が出てくるが、住民との関わりが見えにくい印象を受けた。地域住民はどのような方を想定しているか。

Ａ　地域住民の方々をまだこの事業に落とし込んではいないが、町内会と一緒に共同して進めていきたいと考えている。これについては、市民センターと相談しながら、今回のマップ作りが、実際住んでいる方たちにとってどのような形だとメリットがあるのか、活動を通して模索していきたい。

Ｑ　現在の計画だと、ユーメディアと東北学院大学の計画にしか見えず、どうやってこの事業をまちづくりという形にしていくのか分からない。住民との関わりについても「現地調査」のみとお見受けしているが、そのあたりの巻き込み方を具体的に教えて欲しい。

Ａ　歴史深い荒町エリアで、現地調査の中で荒町に住んでいる方から荒町の歴史をお話ししていただく講演会を開催予定である。現状その程度の関わりになるが、あとはマップを作っていく中で、商店街だけの意見ではなく、実際住んでいる方々の意見も取り込みながら、マップに落とし込んでいきたい。

Ｑ　以前、荒町の別のマップがあったが、その情報は全く活用されず、新しいものとして作っていくのか。

Ａ　これまで商店街が取り組んできた活動は当然継承していくが、そこに学生の視点や若者の視点はあまり入っていなかったと思われる。今回東北学院大学の学生が参加している理由の一つとして、そういった視点も入れていきたいという思いがあり、フィー

ルドワークも学生中心に実施し、マップを作るプロセスも学生の主体性を持って進めていきたい。

Q　令和６年度の活動でどのように未来と結び付け、表現するのか教えていただきたい。
A　マップの作成は未来志向で考えた時の現地点を知るためのもので、今を知り、かつ、未来を見据えていく中で、100 年後の荒巻はどうなっていたら良いか、どの荒町の良さを残していきたいかということを考えながら作成する。その過程で、学生と地域の方と交流を重ねながら、プロセスに時間をかけていきたいと考えている。

Q　COLORweb（仙台・宮城の学生が主体となって発信する Web メディア。学生ならではの視点で調査や取材を行い、株式会社ユーメディアが管理運営を担う）協力ということだが、事業に Web ネットワークをどのように融合させていくのか教えていただきたい。
A　事業の中で街歩きをした際に、活動レポートを Web にアップロードしていただいたことがあった。今後はマップ制作のプロセスでレポート記事を上げていただき、発信の媒体とする予定。

Q　学生が中心になって動くことになれば、誰かがコーディネートする必要があると思うが、中核となる学生はどれくらいいるのか。
A　街歩きに参加した学生は17名で、その中から今回の事業に6名の学生が参加している。その学生が中核となっているが、COLORweb の学生も積極的に参加してもらっている。

Q　マップを作った先の展望があれば教えていただきたい。
A　荒町を知って、未来に向かってできること、やってみたいことを企画して、それを実行して、それを繰り返し、次の世代に残していく。それを 100 年続けていこうと考えている。

（４）事業名：高校生・大学生が自ら学び考える荒浜・深沼エリアの魅力発信
デジタルコンテンツ制作と高大連携（東北福祉大学－常盤木学園高校）
によるデジタル人材の育成
団体名： 一般社団法人　あんしん・すまい・くらし支援機構

＜プレゼン概要＞

・東日本大震災で甚大な被害を受けた荒浜・深沼エリアについて、高校生・大学生が自ら体験しながら学び、さらに、学生がエリアの特色・魅力を再発見、問題点を見つけ、改善案を自ら考えていく。若い世代の自由で柔軟な発想を活かし、荒浜・深沼エリアの魅力の発信、多様な人々が集まる賑わい創出につなげるとともに、地域の将来を担うデジタル人材の育成を図る。

【質疑概要】

Q　3D コンテンツを制作する中で、学生が映像創作やアナウンスを担うとなると、プロと比較し、質の面で差異が出てくると思うが、その点についてどのように考えているか。

A　以前 VR を作った際に、プロのアナウンサーを入れたことで、非常にクオリティが高くなったが、費用が大きくなった。そのため、3D コンテンツは音楽やテロップ等で代用するか否か検討中である。

Q　自己資金が 150 万円に対して、市の助成金が 50 万円ということで、原資についてお聞かせ願いたい。

A　国土交通省からの補助金は VR 制作で既に使っており、完了報告が終わっているもので、それとは一切関係ない。

Q　助成対象経費の全てが NTT 東日本への編集費とされていることについて、具体的にお聞かせ願いたい。

A　編集は学生でもできるよう DX の教育を兼ねる予定で、360°VR を作るにはマッター―ポート（自由な角度から俯瞰的に空間を見ることができる 3D データを作成するためのカメラ）が必要だが、その賃借料が高いのと、画像を何枚も撮って組み合わせていくためにプロの編集が入るため、そこにお金がかかっている。
それ以外の経費では、学生は「ボランティアで構わない」と言うものの、移動するには費用がかかるので、マイクロバスの費用などを算出した。

Q　これだけのお金をかけてコンテンツを作り、どれくらいの効果を狙っているのか教えていただきたい。

A　初年度は効果があまり出ないのではないかと思っている。なぜならば、あまり大々的にやっていないからである。次年度以降は色々な利活用事業者と協力をしながら展開をしようと考えているので、集客効果も含めて期待しているところである。
私達も一生懸命頑張って発信はしているが、発信しきれない部分があり、話題作りの一つとしてプレスリリースとかそういったもので発信し、注目を得ながら次年度以降他の利活用事業者や、地元で活動されている方と協力していきたい。

Q　助成対象事業となれば３年間助成を受けれるが、毎年の自己資金を自社から出せる見込みは立てているのか。

A　見込みはしっかり立てるようにしているが、ご協力いただける利活用事業者から協賛をいただきながら進めていく予定でいる。ただし、足りない時は自社の方で頑張って拠出しなければならない。

Q　実施計画の中で、フィールドワークやワーキンググループがかなりの回数開かれるようだが、大学生であればある程度自由度は高いが、高校生は時間を取ることは難しいと思うが大丈夫か。

A　この高大連携の協定の中では、東北福祉大が先導して色々と調整していただいており、昨年、他の事業で常盤木学園と一緒に行った際にも、スケジュール感のところは色々お力添えいただいた。あまり学業の負担にならないようにと考えている。

（５）事業名： 仙臺屋台を活用した「沿岸部の魅力を拡張・発信する」プロジェクト
団体名：株式会社めぐみキッチン

＜プレゼン概要＞

・沿岸部の屋外を楽しむための移動拠点として屋台を活用
常設場所である活動拠点（荒浜ベース）、あるいは沿岸部地域内の様々な魅力ある場所へと屋台を運び、「移動拠点」として活用しながら、その場所の魅力を直接体感しやすい各種イベントを実施する。

・仙台市沿岸部を舞台とした「人が集まり語らう場」として屋台を活用
この地域に関わりを持つ方々と語らいアーカイブしていく「屋台トーク」を継続しつつ、この地域の魅力的な場所･風景の中で居合わせた方々と語らいながら時間を共有する「屋台バー」のような活用も検討する。

・屋台の修繕・機能拡張ワークショップ
経年劣化を防ぐために、防腐防水塗料の塗り直しを行い、かつ上記の屋台活用イベントを展開する上で必要になる拡張部分（火除け・テーブル・椅子等）をワークショップ形式にて追加修繕・製作する。

・各種イベントの記録と情報発信
各種イベントの写真・テキストでのブログ公開発信の他に、「屋台トーク」では映像・音声など「その場限りではない残せる記録」を収録・アーカイブする。

Ｑ　人と人との繋がりが出てきた中で、内輪な雰囲気が出やすくなることがあるが、興味のある方へ参加しやすい工夫があれば教えていただきたい。

Ａ　まず、チラシを作って配布することが大事だと思っている。また、今年度は団体の活動拠点である荒浜ベースでのイベントが多かったが、来年度は深沼ベースでイベントを多く開催し、沢山の方に来ていただきたい。他にも、荒井駅前に屋台を持っていき、気軽に立ち寄れるイベントも検討したい。

Ｑ　収支予算書の中で屋台活用イベントの参加費が 3,000 円もしくは 4,000 円と書かれているが、内容について教えていただきたい。

Ａ　荒浜の B 級グルメのような食べ物の開発を検討していて、お腹いっぱい食べられるような内容にしたいこと。また、音楽も提供したいと考えており、ミュージシャンへの謝礼金も含めると、3,000 円程度が妥当と考えている。

Ｑ　屋台を活用したトークイベントについて、今年度は開催するのか。来年度はどのような計画なのか構想をお聞かせ願いたい。

Ａ　まず、３月２４日に若林区長をお招きし開催する予定である。区長の目で荒浜をどのように見ているかお聞きし、活動に対するご意見、アドバイスもいただきたいと思っている。来年度については、跡地利活用事業者をお呼びし、会議室ではなくて、屋台を囲んでフランクに話せればと考えている。

Ｑ　収支予算書の中で屋台トーク消耗品費として 30,000 円計上されているが、これは毎回か

かるものなのか。備品関係には金額に制限があるが大丈夫か。

A　屋台トークで使用するカメラとマイクを購入する予定であり、金額には留意したい。